

### <論文>河上の月影：『洞窟』・埴谷雄高について

森島, 稔

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

90

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

1987-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019537>

# 河上の月影

——『洞窟』・埴谷雄高について——

森 島 稔

世界の真昼

この痛い明るさのなかで人間と事物に関するあらゆる自明性にわれわれは傷つけられている！

〔一九四〇年代・夏〕 田村 隆二

## 不快の影

昭和七年という時は幾多の青年達の志の物語を転換させることとなる。大陸では、その数年前から西洋の濫熟の模造が夜々に光と翳の明確な区分をつくり出し、それをなぞるようにしてその地上、あるいは地下で、不穏な動きが続いていた。が、いよいよこの年早々の一月、第一次上海事変として表面化し、三月には満洲国建国が宣言される。国内も同様で五月には、五・一五事件が起っている。その一つ一つの動きが、日本がそれまでになく大きく、巧妙複雑で、持続的な、資本主義的戦争に、いよいよ突入する前夜の昂揚を思わせる。それは、我々日本人が明治の維新以後、懸命に身につけよう

として学んだ西洋的近代をはじめて基盤にできた、更に言えば、ようやくその列強諸国と肩を並べ得る位置で行なわれる、その意味で初めての総力戦争であった。それは、一つの殖産興業的な明治の戦争ではなく、経済戦・外交戦・政策戦・内政戦・思想戦・などあらゆる意味を含む総体としての近代的侵略戦争であった。しかも、その相手はまぎれもなく彼の西洋に近代である。実際の戦場の半ば以上がアジアの地であったにもかかわらず、当時もそのように考えられていた。なぜならそれは、伊藤整が『太平洋戦争日記』(一)で、はからずも吐露したように、「我々は白人の第一級者と戦う外、世界一流人の自覚に立てない宿命をもっている」と感じていたからである。

そしてとにかく、日本の国内体制もこの前年あたりからこの戦争への傾斜が前述の如く急速に表面化してきている。そのような中で、昭和五年二十歳でプロレタリア科学農業問題研究会に参加し、以来農民運動の組織化に精力的に動いていた般若豊という一青年

も、この昭和七年三月、仲間の伊達信宅で逮捕され、五月には不敬罪と治安維持法によって豊多摩刑務所に拘留され、彼の物語に大きな転機を迎える。この青年が後の埴谷雄高であり、この転機がいわゆる転向であるの言うまでもないだろう。この転向を中心にした「豊多摩体験」と呼ばれている「灰色の壁」の中の思索を通して独自の「自同律の不快」の方向を獲得し、数回に亘り病監に移されながら、翌昭和八年、上申書を提出し、同年十一月、懲役二年執行猶予四年で埴谷は出所している。

この昭和八年国内では、二月に小林多喜二が虐殺され、三月、国際連盟脱退。五月に京大事件が起り、六月には佐野学・鍋山貞親の転向声明が発表されている。そして埴谷出所後の十二月には、後に言う「リンチ共産党事件」も発生している。

このように見て来ると、この昭和の二年間は、国家体制自体も戦争という「体制化」「コスモス」のための「混乱」「カオス」の期間と考えることができるのではないだろうか。このような混沌とした状況の中で、青年埴谷雄高は独特な転向体験を通し、現在まで営々と続く「自同律の不快」と「虚体」という「埴谷的思索」の方位を獲得したのである。

そこで本題に入る前に、昭和五六年十一月号「国文学 解釈と教材の研究」に発表された山田有策氏の論「第一章『癡狂院にて』を軸として」にある、『死霊』作品内時間の考察、を見ていくつか興味深いことに気づいたので本論にも多少なりと関係があることこのいくつかの指摘だけこの場で行っておきたい。

山田氏の測定の根拠は、『死霊五章』の「スパイ査問」の件を、

昭和八年十二月の「リンチ共産党事件」を素材にしていると考える所から始まる。するとこの『死霊』の現在時は昭和十二年夏ということになり、同年二月に実際に起った宗教的自殺教団「死のう団」の割腹事件と首猛夫の「死のう団」とが一致する、というものである。

そこでもしこの測定通りだとすれば、『死霊』中に言われる三輪与志が『自同律の考究』という論文を書き始めるのが、埴谷が豊多摩刑務所の「灰色の壁」にいた時期と重なる、昭和七年の夏から秋にかけてということになる。更に、『死霊』の現在が昭和十二年夏の終わりとする、この年は埴谷の執行猶予の終わる四年目の年にあたり、同年七月には蘆溝橋事件から日中戦争が始まり、九月には国民精神総動員計画、十一月に日独伊防共協定、そして十二月には国内では人民戦線第一次検挙が行われ、中国では第二次国共合作が成立している。

埴谷の年譜的事項（白川正芳、立石伯、両氏のもの参照）で、昭和十四年十月、同人誌「構想」創刊までに非常にあいまいな点がいまだ多くあり、就中、昭和九年に吉祥寺の現住所に移転してからこの昭和十四年十月までは、ほぼ空白であることを考えたとき、ここから多くの手懸りがつかめるのではないだろうか。

さて、ところで本題の埴谷雄高の文学的営為としては初めての表出である『洞窟』と『不合理ゆえに吾信ず』（初出タイトルは、『Credo, Quia Absurdum.』だが、単行本は右の和名になっているので以下これに準ずる。）が同人誌「構想」紙上に掲載され始めたのは、右仮説の『死霊』の現在時から更に二年後の昭和十四年十月で

ある。そしてこの前月に第二次世界大戦が勃発している。この誌の終刊の昭和十六年十二月に至っては、いよいよ日米戦が開始され、その二ヶ月前には例のゾルゲ事件が起っている。ここまで述べてきて、いよいよある時代の符牒を私は感じずにはおれない。

右に述べて来たように考えた時、『死霊』執筆時に於いては、『洞窟』と『不合理ゆえに吾信ず』は、〈自同律の不快〉の意味の獲得過程、(それはすなわち埴谷にとつての転向の意を表わす)を示す始発点と、〈虚体〉という行き先として、『死霊』内世界に消化されているとも考えられるだろう。事実、埴谷自身が近年に至り、この『洞窟』を「古い時代の習作」<sup>(2)</sup>と語っている。しかし、これらが発表され始めた昭和十四年時点に於いては、恰も、地上と月というように不可分の関係をもっていたはずである。もっと言えば、私はこの二作があったために、『死霊』は現在のようになかたちでかかれなければならないかったのではないかとさえ考えている。詳述は省くが何故ならそれは『洞窟』という地球上の世界ではその引力に逆えないし、アフォリズムという月の世界でも、何かを思った時、その思う先に地球という引力を感じてしまう。「信ず」という正方向に力が作用した時、そこでは根拠であるべき「不合理」(人間ありのまま)が疎外されてしまう。そこで本来的な正作用の世界像と考えられている時空連続体的世界を断絶し死に至らしめることで負作用すなわちあらゆるものが浮き上がる反転的世界像である『死霊』の世界に至ったと考えるからである。

この詳述も含め『死霊』自体についても早い時期に論考したいと考えているが、結論をいそげば、この昭和十四年の段階で、この二

作品は、不可分の二作品である故でもあるが、いまだ地球の引力に逆らえずにいた。即ち地に足が接触していたように私には思える。勿論、埴谷が願った行き先は『不合理ゆえに吾信ず』にあるように地球の引力など縁もない、唯一絶体(一體?全体?)の孤絶の国である。しかし引力は月の光のように細くも月へのその作用をやめない。(その理由を私は、この時代の「自同律」とその「不快」に見る。)だとすれば、ここで私はまず第一に〈自同律の不快〉という独特の概念を中心としたこの二作品の機が熟していたかどうかという問題についてこの前後の書かれたものを含めて考察していかなければならないが、すでにかんがりの寄り道に紙幅を費やしてしまった。そこで再び結論だけ先に述べれば、〈自同律の不快〉の方向性はほぼ定まり、その機は熟していたと私は考えている。ところが、そこでもう一つ問題となるのがこの時期の〈自同律の不快〉の質である。

そこでもまず、自同律そのものについて私なりに考えてみたい。

・私 | a | c<sub>1</sub> | b | c<sub>2</sub> | 私 | である。

本来論理学上の命題の一つで、通常同一律と呼ばれるこれが、その言語的表現である。(勿論、通常論理学的に把握する場合、「私」は無作為な例え「X」などが置かれる。)これを文法的にみると a + c<sub>1</sub>である「私は」が主語であり、b + c<sub>2</sub>である「私である」が述語である。しかしこれを論理的に考えた場合、aの「私」は主

辞であり、bの「私」は賓辞であり、 $c_1 + c_2$ は繫辞であると考えることができる。この繫辞を更に詳細に分類した時、 $c_1$ は屬性をもち、 $c_2$ が悟性であることがわかるだろう。

このデカルト以降營々と築かれてきた日常的私たちの「存在」として自明の理であるこの自同律に「不快」を感じると埴谷は語るのである。もっとも大岡昇平「仮りの座標」（「国文学 解釈と教材の研究」昭和五六年十一月号）に言わせれば、「AはAなりの同一律は、形式論理的には、排他律、AはBならばCでない、その他の公理の前提として、あとで附加されたものだから、ともに考えれば不快になるのは当然である。」さすがに『俘虜記』の作家らしい言い方だが、その「不快」が自同律の何に由来するのかを思想的に探究した所が埴谷の面目といえるだろう。感覚と論理という相反するものを融合統一するという、カオスからコスモスを創るという埴谷の資質がここにすでに現われている。それでは埴谷にとって「不快」は自同律の何に由来するのか。それはまちがいに繫辞の問題である。

〔俺は——〕と呟きはじめた彼は、〔——俺である〕と呟きつづけることがどうしても出来なかつたのである。敢えてそう呟くことは名状しがたい不快なのであった。……（略）……主辞と賓辞の間に、跨ぎ越せぬほど怖ろしい不快の深淵が亀裂を拡げていて、その不快の感覚は少年期に彼を襲つてきた異常な気配への怯えに似ていた。

『死霊』 傍点——森島

「主辞と賓辞の間」とはまさしく繫辞のことであり、つまり繫辞という主辞と賓辞に対する「作用」に埴谷は独得の「不快」を感じているのである。ここで特に注意すべきことは、主辞や賓辞とちがい繫辞は実体ある名辞ではなく、「作用」すなわち「運動」である点である。であるからこれは感覚的にしか触知できない「不快」なのである。そして、この「不快」は細かく二点に分けることができる。 $c_1$ である属性という地球上の引力と、 $c_2$ である悟性、と言う一種のあきらめである。これが『不合理ゆえに吾信ず』で述べられる〈賓辞の魔力〉に苦しんだあげく至りついた〈属性の魔力〉である。

この二つの「不快」が少年期から洞窟たる豊多摩刑務所に拘置されるまでに徐々に育成されてきた〈自同律の不快〉の本源の姿である。これらの源となる埴谷自身の少年期の三つの事件については、大岡昇平との対談『二つの同時代史』（岩波書店）で詳しく埴谷自身によって語られているので参照して欲しい。とにかくそれは、いまだ「感覚の不快」といった体のものであったようである。

この「感覚の不快」といった漠たるものを、自己の思索の方向性としての〈自同律の不快〉に大きく展開させたのが埴谷の言う「豊多摩体験」<sup>(3)</sup> 即ち転向である。そして、この『洞窟』が小説として用意したものが、自己の特異な思索の方向性をもつに至る〈自同律の不快〉の獲得過程なのである。これによって、埴谷は月である処の『不合理ゆえに吾信ず』への道を示唆しようとしたのだ。

## 洞窟の中の不快

さて、この『洞窟』は「その内界」と「その外界」に二分されている。この二つの世界の通底器が主人公の「彼」であり、言ってみればこの両界の総体は、「彼」のその時点での存在自体と取ることができらるだろう。

そこでまず「その内界」だが、主人公である「彼」という人物の病監と思われる所に入っている、その時点での心の内的状況と、「彼」が「本質的不快」と語っている感覚に至るまでの、「彼」の心の移動型が語られている。そしてこの心の内的物語は、「彼」の幼少年期の大きく分けて三つの回想によって成立している。これは、植谷自身の実際の体験を下敷にしたものであり、これら幾多の体験によって引き起される感覚経験が、植谷独自の思想を育成させた核となる事件であったことは多くの機会に植谷自身によって語られている。それらを一つずつ引用する紙幅はもたないが、簡潔にまとめてみると、まず明治四十二年十二月十九日の誕生から大正十一年植谷十二歳の折の東京移転までの、植民地台湾での生活体験があげられる。彼地で植谷は幼いながら「支配」という現実を見たという。それによって、「日本人嫌い」と、「日本人」と「台湾人」といった閉じた輪に対する思いという「二重性」が培われたと語っている。

このため思索的になっていった植谷少年にこの漠たる思いを自覚的にさせる小学校時代の三つの体験があると言う。この中の一つが「内界」の「彼」が少年時代足を折ったという挿話として回想され

ているものである。これらによって「暗いニヒリズム」が醸成され  
たらしい。

この「暗いニヒリズム」を決定的にするのが大正十四年、植谷中学四年生時の結核である。その中で、やはり「内界」中にあるように、「自然死のようなかたちの自殺」について様々に考えたそうである。ここにアナキズムへの一つの移行が見える。

これらのことは前出『二つの同時代史』I・IIに詳しいので一読していただきたいが、以上のように、この時点での「彼」の身体的要件に関する感覚の移動型はこの「内界」に大部分収斂されているといっていいたいだろう。そしてこの作品が小説の形態で表現されたことで、即ちこの作品の諸要素たる登場人物たちは、地上を離れた「象徴」の形式としてあるのでなく、引力に作用される、つまりは現実に影を曳く「喩」の形式で成立しているのである。そこで、仮にこれらの登場人物群を植谷の感覚経験と符号するように推測してみようと思う。

まず、「内界」「外界」に亘り「彼」を刺激し、「今まで気付かなかったことを教える」「陰険な」「雑役夫」は、少年期のアナキズムがレーニンによってマルクス主義に変化しカントに至る「左翼体験」を髣髴とさせる。これは「外界」でより明確な形をとるので、後にもう一度考えてみることにする。

次に、この「内界」の回想でもっとも多くを費される人物、隣の「少女」は、ごく一般的な人物像であり、その内側にはデカルト以降の、そこから一步もひるまない「近代的（西洋の流れの中の）自我」をもっているものとして描かれている。「障害も焦慮も知ら

ない傲然たる本性——(略)人間がこんな風に生き得るなんて、何と云ふ屈辱だらうか。」と、その本性と それに対する「彼」の感情が語られている。これは『不合理ゆえに吾信ず』中の七ツ目、「——薔薇、屈辱、自同律——つづめていえば俺はこれだけ」という詞章に因って来るだろう。つまり、「彼」が「傲然たる本性」に「屈辱」を感じるということは、この「本性」を持つ「少女」も又、「自同律」を中心とする「近代的自我」を持つとして、その意識すらほとんどない一般的人間と言うことだろう。そして、この「少女」との関りの中で、「彼」の「本質的不快」の一要因が次のように語られる。

常に或る普遍的なもの、恐らく、自己を自己と考へる種類のあの力の本源に対し、不逞極まる態度に駆られながら、まるで狂暴に向けられたものなのであった。

(傍点——森島)

そして、「彼」の精神は、「丁度、少女の家と反対がわ」に住む「強情無類の腕白小僧」を通して、このような一つのエゴが、「何がぶち破った完璧の主張」であると思う。つまり「彼」は「自己を自己と考へる種類のあの力の本源」に対する自己の「不逞極まる態度」||エゴが「何かぶち破」るものであることを感知している。これは埴谷が語る「シユティルナー体験」<sup>(4)</sup>に比すことができるだろう。

これら「本質的不快」の遠因は、次の回想、「彼」が少年時代足

を折ったこととして語られる。前述したように、これは埴谷の実体験の小説化であるが、それを「幸福めがけて飛びおたこと」として語っている。これについては鶴見俊輔の「虚無主義の形成」(『共同研究 転向』上)の中に上手な解釈がなされているのでまずそれを引用してみる。

：時間の流れの先に破局があり、その破局の瞬間(あるいは破局を予想する瞬間)の中に円環的な時間全体のイメージが完成する。このようにして、破局が同時に調和になるという考えかた：

ただし、この解釈の上で注意しなければならない点がある。それは、「破局」の同一瞬間にはじめて「調和」をイメージできたというその「幸福」が「獨りきりだ」という感情に支えられている点である。あらゆるものから意識が断絶あるいは孤立できたときはじめて「幸福」を感じた「彼」は、その後、この感覚から「優れた自殺の方法」を発見する。それは埴谷が語る「自然死のようなかたちの自殺」を思い起させる。

：もっと優れた自殺の方法を僕は考えついでしまったんです。それは生まれれないということなんです。生まれてきたはずがないと、確く思ひこむことなんです。母さんの子でも父さんの子でもないとはっきり知ることなんです。それなのに、僕は、やはり、母さんや父さんの子なんですからね。どうです！ これでも、僕は自殺していませんよかね。」

(傍点——森島)

しかし、この方法を「彼」は 気狂いが周りの者を気狂いと怒鳴るといふ話をして、結局は自殺というもの自体を「恐ろしく傲ったもの」として一息に否定してしまふ。

この自殺は、自己の死による〈属性の魔力〉  
「不快」からの解放の目論見だったのである。系統発生的なものを否定し、自己意識を純化しようと試る。感覺的「不快」である以上、それは「思いこむ」ことで済むはずであった。しかし自己の存在自体は父母の子であることを回避できない。結局、自己の単体としての純粹意識は、自己の存在によって疎外されるということに、この時「不意に口をつぐんだ」。「彼」は気づくのである。「存在」と「近代的自我」と「不快」の構図について、この時「彼」は感知したのである。だから「彼」は、「そのときだけがなにかうんざりしてしまふほど彼は明確で、矛盾がなかった。」(傍点部は、『虚空』昭和三五年現代思潮社版では「澄みきったほど」である。)のだから。ここで「内界」は閉じられている。

次いで「その外界」に眼を転じると、「彼」が否応なくこの病監の中の現実 $\parallel$ 自己の「外界」に對峙することによる「彼」の心の移動型が描かれている。そして、ここでも「彼」の心的状況に作用するのは人々の想念である。

……ここの人々——そのありかたにひそんでいる名状しがたい理由

の想念が彼には悩ましかつたのである。

そこで、「その内界」同様、登場人物に関係づけてその推移を考へて行きたい。

まず、「彼」が「沈黙の生活」をはじめめる以前の部分であるが、ここでは自称「牧師」が中心である。この「牧師」からはレーニンの姿が髣髴とされる。その理由に「死んだ男」との関係がある。

：「天国はあるものでしょうか。」と死んだ男は訊いたのだ。「神さまはいらないけれど、天国だけはあつて欲しいのです。」というふうにいふたそうだ。こいつは、「あります。」と答えたそうだ。

死んだ男はなにか安心したふうだったよ。怖ろしく無知な男だった。ところが、どうしたものか、その後、急に不安になつてきたらしかつたのだ。懺悔をしたいといひ出したのはそれからのことだ。ねえ、こうしたことをつくつくいい張りはじめたのは、奇妙なことだ。あんな男がこうしたことをつつくいいなんて、そのことが不思議だつたのだ。

(傍点——森島)

ここではきわめて素朴な信仰のはじまりのようなものが描かれているが、この挿話の質をこの論の最初で述べたような時代背景に照らしたとき、自ら写し出されるものがある。それは、この当時の指導者層ではないプロレタリアート達の、レーニンあるいはプロレタ



リア運動の漠然とした受容の姿である。昭和五年二十歳でプロレタリア科学研究所農業問題研究会に入ってから、昭和七年に逮捕されるまで、農民運動の組織化に従事していた埴谷にとって、「神」は知らないが「天国」だけは欲しいという大衆の感情は熟知されたものだったであろう。<sup>(5)</sup>この「天国」の渴望というのは極めて実際的なものである。そして推測の域に入ってしまうが、更に仮定を広げれば、だから多くの大衆というプロレタリアートは感覚的にプロレタリア運動よりも、「王道楽土」の建設に夢と現実性を感じたのではないだろうか。勿論それが理由の全部ではないとしても、この時点で、日本共産党乃至プロレタリア運動が大衆にとってあまり魅力のないものになっていたのではないだろうか。そして更に、埴谷自身にもそのような感情が起り始めていたのではないだろうか。だからこの「死んだ男」の唐突な「不安」と「懺悔」という本質的に「天国」を希求する感情の変化を、「奇妙だ。」と相槌を打ちながらも、この話をする男に向って、「君がなんだかつまらなくなってきたようだ。」と「彼」は言うのではないだろうか。

そして、いよいよ『死霊』の原型のような、キリストとシャカを話題にする部分であるが、ここで、レーニンを「一種の模写説」<sup>(4)</sup>と考えていた埴谷は、「牧師」をキリストからシャカの「慈悲」の方に近づけて行く過程に、埴谷自身のレーニンからカントへの移行を重ね合わせているように思われる。それは、自然がまず在る物である、と考えることで、この移行を容易にしている。

——自然のままなのだ。(と、彼は急に男を鋭く見据えなが

ら叫んだ。)だから奇妙なことが起る。(略)自然だからこんなおそろしい矛盾が堂々と存在し得るのだ。だが、奇妙だ。俺はなにか風変りのことや変人に会ったりすると、すぐ、この自然のままということを想い出すのだ。ふむ、変人は皆、或る意味で、最も合理的なものだよ。

(傍点——森島)

つまりは「自然の畏」である。そこにはあらゆる合理性が矛盾と共にはりめぐらされている。そして、それらはすべて「自然」なのである。だから「牧師」は「わたしの不幸は、これだ！ というものが決してないだろうことなのです。」と言う。あらゆるものが「自然」という名の合理によって呑み込まれ収斂されてしまう。この「自然」はあらゆる「不合理」を疎外する壁なのである。

以上のように「彼」は「外界」の構造の畏を知り、「沈黙の生活」の果てに、「その内界」の「不快」の感覚の思惟形式の変更による感覚形式の変化である本質的な「在在の不快」即ち「自同律の不快」による一場面を夢見るに至るのである。

——ねえ、奇妙だわ。

——何がですか。

と彼は真面目に問い返した。

——何がって。なにか奇妙なの。貴方をみていると、(と、恐ろしくに婦人はいった。)なんだか「貴方」って気がしないのよ。

しかしここでは以前として、「(ねえ、そうでしょう?) そうあ

つてはならないことでしょう。」と、逡巡のうちに語られている点に注意しなければならぬ。恐らくそれは、この時点でまだ「自同律の不快」が本来の「自ら働く自我」<sup>(4)</sup>になっっていないからである。

——ねえ、眼をそらして気をまぎらさないで、私を眺めてごらんなさい。そして《私》は《私》だと考えてみるんです。ほら、いけません、眼をそらしては。よそを眺めて、或る理由を見つけて出してくるのはまだ許されてないんですからね。ねえ、私を——私だけを眺めるんです。

(傍点——森島)

自己だけを凝視める。あらゆる「外界」の理由という罫から断ち切れるために純粹に自己の主辞と賓辞を凝視め、「不快」を逸すどころか「不快」の中に浸る。これが埴谷の「灰色の壁」の中での転向に対する姿勢であったのだろう。「自ら働く自我」という積極的意義を担う完全な「自同律の不快」を獲得するためには、まず今までの自我である「外界」の「属性」を捨てる必要があるからである。それではじめて主辞を主体とする無限定な、つまり存在を超えられる自我への第一歩となるのである。

そして次の部分で「(ここまで——それがきているのに、どうして俺がこれになにか気のきいた言葉でいい表わせないのである。)」と、この独得の思索が思うように進まない苛立ちを「彼」に吐露させながら、「牧師」の放免について語っている。

——再審にまわったのさ。あの男は、調べに殺さなかったとしか答えられなかったのだ。君にもそうだったのだろうか？ えっ？ 奇妙だ。(と、男は顔を寄せるようにい囁た。)その盲の女の子は、自身で首を締めたというよ。

——君は、まったく疑り深いね。

と、彼が男をみつめたとき、男は皮肉そうにまじまじと彼を眺めた。

——ふむ、自殺してはいけないのだろうか。

——君は、(殺す意志があったかは解らない)と、いつているようだ。

——へえ？ そうでもないよ。(と、男はさらに皮肉そうに彼をまじまじ眺めつづけた。)俺はその盲の女の子が、どうした格構で自身をしめたか考えているんだ。

ここでははっきりと「牧師」に「殺す意志」があったかどうかの問題とされている。「盲の女の子」の「自身で首を締めた」という異常な行為よりも、対他者である「牧師」の「意志」が問題にされているのである。この、行為と切り離されて、その意識のありようそのものを問題とする「彼」の在り方に、埴谷自身の転向の質を重ね合わせる事ができるだろう。「その内界」に於て自殺を放棄しなければならなかったように、問題は、存在に対する意識||感情なのである。

こうした中で、ついに「雑役夫」は自己意識の不連続性、あるいは感覚的突発性への可能性を指摘するに至るのである。

——俺はいいたいのだ。つまり、或る強烈な瞬間——子供に意識が得られるとき、おそらく、そこには俺のなにもまったく入る余地がないはずだ。ねえ、そうすれば、その瞬間の意識からして——この俺は、子供に対して、いいかい？ まったく責任がないと、ふむ、はっきり知ったのだ。

このように、意識が、存在に対して、不連続性あるいは無関係性という自由と、突発性という運動性をもつ可能性を指摘された「彼」は、その可能性の所在が自同律に関係していることを知っていることを次のように仄めかしている。「俺だけが——俺だけが知っているのだ。とね。ふむ、そうだろうか。お前のなかにお前がいてそれが呟いたらどうだろうか。」と。

つまり、この『洞窟』という作品の中には、〈自ら働く自我〉としての積極的意味での本来的な〈自同律の不快〉の質を読みとることは困難だが、これのもつ可能性という意味の方向性は十分に読むことができるし、なにより埴谷の転向の様子と、その成果としての〈自同律の不快〉の成立の意味を地上の引力の中で、リアリティーを疎外することなしに問う試みをしていることにこの作品の大きな意義がある。

すなわち「不合理」たる感情は「信ずる」に価するところについて到達したのである。

〔感情の塑像〕 3・前了)

## 注

(1) 『影絵の世界』で語られる転向に至る豊多摩刑務所内での時期を指す。

(2) 『虚空』あとがきより。

(3) 『影絵の世界』他多くに埴谷自身によって語られる、「灰色の壁」の中でカントに啓示を享け独得の思索に至る、拘置期間の体験を指す。

(4) 『二つの同時代史』から便宜上埴谷の回想の部分を多く引用した。

(5) 「農民委員会の組織について」(『石棺と年輪』所収)という「構想」以前の文章などからの推測される。

尚、注のない部分引用と、括弧内引用は、すべて『虚空』(現代思潮社昭和三五年初版)の『洞窟』によった。「構想」初出と弱干の異同はあるが、言いまわし程度のものがほとんどなので個所以外指摘はあえてしませんでした。

(一九八七年大学院修士課程修了)